

10年後に見えるもの

～先輩の言葉の意味とは～



小笠原 聡 (おがさわらさとし)

昭和57年12月17日生まれ
青森県田子町出身

2000年

ホテル勤務
今の奥さんと出会う

2016年3月

退社し相馬に移り住む
同時にリンゴ農家に就農
JA相馬村青年部に入部

2018、19年

青森県りんご協会の若手育成
事業に参加

2020年

「りんご病害虫マスター」研
修会に参加

経営体系 経営主 義父

義母

小笠原 聡

小笠原 志麻

以前、小笠原さんは相馬地区へ移住してきた翌年に、当広報誌で一度インタビューを受けていた。そこでは、出会った人脈を活かしているいろいろなことに挑戦していきたいと話していた。

今回は、現在まで小笠原さんがどんな波乱万丈な農業ライフを過ごしてきたか紹介していきたい。

ほんやりと始めた農業

小笠原さんは、田子町出身で、父は長距離ドライバー、母は専業主婦であった為、農業とは遠い縁の家庭で育った。男2人兄弟の次男として生まれ、高校卒業後は県内でホテルマンとして、客室清掃や厨房、ホールスタッフなどをこなし、7年目からはリーダーとしてホテル業務の管理を行っていた。また、職場で知り合った志麻さんと結婚し、娘を授かり3人で十和田市に居住していた。

ある日、リンゴ農家を営む妻の父が農作業事故で怪我をしたとの連絡があった。治療の末に治ったものの、以前の様な動きが出来なく、少しずつ畑を縮小していきたいという相談が妻にきた。

妻の実家は4人姉妹であり、話し合いの末、長女が畑を手伝うことになり、やってみてが合わずに2年程でやめた。妻は小笠原さんに「リンゴ農家やってみない？ 聡がやるなら私も頑張るよ」と相談を持ち掛けた。小笠原さんは「い

いよ。人生1度きりだし、医者や宇宙飛行士は諦めていたけど、それ以外なら何でもやりたいと思っていた」と笑顔で承諾したと言った。そして、2016年3月に15年間勤めたホテルマンを辞め、家族一緒に弘前市相馬地区へ移り住み、就農した。

青年部から広がる仲間の絆

小笠原さんは、就農を決めたことと同時に新天地で働くことや生活することに対し、仲間や友達が出来るだろうか、仕事に順応していく事が出来るだろうかと不安を抱えていた。

そこで、初めて参加した組織は「JA相馬村青年部」。きっかけは、妻の同級生の夫が当時の青年部長であったことから、妻が同級生に連絡。「まずは地域の仲間を増やさないと」と声をかけてもらったのが成田陽平元部長である。入部前、青年部には20代、30代は数人しかいないだろうと勝手に思っていた。

しかし、実際には同年代や年齢の近い盟友が30名以上いたことで驚いた。そして、年齢の近い仲間が一気に増えたことで、「一緒に頑張る仲間ができた」とやる気が湧いてきた。さらに、入部のきっかけとなった成田部長は自分と同じ境遇である「お嬢さん」であった。その繋がりもあり、熱心に面倒を見てもらい「まずは人を覚える事」「10年は我慢する事」などと声をかけてもらった。その後、盟友からの紹介もあり、地域の消防団に参加し、冬は地元のスキー場で働くことで地域交流を深める事が出来た。

そこからは、スポーツ大会や地域の草刈り、子供会のイベントなどに呼んでももらえることも増えた。さらに「婿」と呼ばれていたものが、名前で呼んでももらえることが多くなったことで、親近感がわき、一緒にお酒を交わすことが増えた。その中で、リンゴ栽培のことはもとより、一人一人のリンゴ栽培に関するこだわりや過去の失敗談、将来の展望の話など、教科書には

ない事を沢山学ぶことが出来た。また、盟友の紹介により青森県りんご協会主催の若手育成事業にも参加。2年間で約200時間の座学と実践を学んで技術向上が図られたほか、更に広い地域への仲間を作る良い機会を得た。そこでは同じ悩みを話し合い、同じ境遇の仲間が私以外にもいることが分かり、今後一緒に頑張れる仲間がいることを実感した。

立ちほだかる農業の壁

就農して間もなく、頼れる仲間や地域の人達の関わりも広げていく事が出来た。その一方で、農作



相馬小学校に上がると同時に相馬地区に移住

業は問題も多く、農家の大変さを痛感する事となる。

まずは、健康面の問題に直面する。それは日光アレルギーの発症。これまで、長年ホテルマンとして室内で働いてきた小笠原さんはアレルギーとは無縁であった為、夜眠れなくなるほどの痒みに襲われ、精神的にとても応えた。夜眠れなくなり、昼寝をすると寝過ぎることが増え、自然と朝も起きる事が辛くなっていった。就農して2年目からは、健康面の改善を最優先に考えた。まずは、肌の露出を抑える為に長袖を着るようにしたが、汗疹になり失敗。生活リズムは改善することなく、15年間室内で働いた私の体は簡単に順応してくれなかった。

視野よりももっと広く、計画と実行を念頭に置いたトライ&エラーで取組むことの大切さを学んだ。何よりも、自分の知らない情報は畑と家の往復では得ることが出来ないことを痛感した。

仕事面では、毎日の単調な作業に対して、自分の仕事量が対価に見合っているか不安を抱えながら毎日を過ごした。ホテルマン時代はパソコンを使って仕事のスケジュールを組んでいたことで、1カ月先の予定を把握して仕事をしていた。しかし、農業での仕事のスケジュールは義父から毎日指示があるわけでもなく、雰囲気作業に当たっている状況であり、時給換算と言言葉が恐ろしい程であった。

その後、就農前にもらっていた給料の生活から一変し、「これからやっていけるのか」という不安を抱きながら過ごしていた。

そしていつからか感じていた農業への不平や不満は、家の農業のやり方に問題があると感じ、家の愚痴へ変わっていった。何か気が

くわないことがあると色々指摘される。「なんでうちシルバークの留め具を6個使っているんだろ」「なんで俺のやっている事が気に入らないんだろ」とつづやることが多々あった。

その後小笠原さんは、交流の深い盟友の園地に作業を手伝いに行く事があり、色々な人の作業内容や方法、雇用人数などを見たことで「自分は今何をしなければならぬのか、どうして他の園地はこうしているのに自分の園地はこうしているのか」という疑問を抱き始めた。

そこで、就農3年目の小笠原さんは、経営主である義父に自分の考えたことを話してみることにした。「少しで良いから自分で畑をやってみたい。妻と2人で頑張るから少し義父さん休んでみたらどうですか?」と。否定されるのではないかと不安な気持ちを抱きながら、勇気を振り絞って話すと、「追い追いな」といつ先の見えない一言で返され、小笠原さんの気持ちは一瞬で絶望的な気持ちへ変

わった。まるで、農村部が外部からの人を受け入れたがらない様に、義父が外部から来た小笠原さんを受け入れられない人の様に見えた。それからというもの、小笠原さんの内心には「どうしようかな。でていこうかな。家族と一緒に地元に戻ろうかな」という気持ちがぐるぐると回りながら過ぎていった。「ここで挫折したら、一時の迷いで農業をやめたと言われるかもしれないが、もともと農業に足を踏み入れたこと自体が気の迷いだったと思えばまだ救われる」そんな気持ちになるほど私の気持ちは落ち込んでいた。



当時活躍した空調服

再起させてくれた先輩の一言

今後について落ち込んでいた私はある日、同じ境遇の婿であり、成田部長の次の部長である五所地区の佐久間康幸元部長と飲ミニケーションを交わす機会があった。彼の家は小笠原さんの家と近く、畑でもよく見かける事もあり、何度か声をかけてもうつっていた。生まれ土地ではないものの、地元の先輩達からの厚い信頼があった彼は、同じ婿として憧れの先輩となっていた。「なんか夢とか目標ってあるのか？」と佐久間部長に聞かれ、明確な夢も目標もなかった小笠原さんはすぐに返答することが出来なかった。そんな小笠原さんを見て「小笠原は、いろんなところに行つて勉強してきているけども、実際にそれを活かす場がないよな。その学んだ事を活かす為にも義父に認めてもらつて、自分で畑やりたいよな。一度断れたくらいで落ち込んでいてもだめだ。少しずつ良いから試行錯誤して、10年は我慢する事だ」といつ言葉

をかけてもらった。

そこで、小笠原さんが入部当初に声をかけてもらった成田部長にも「10年は我慢」と言つてもらつたことを思い出した。なぜ2人の部長は10年我慢と言つたのだろうか。その言葉が気になり、成田部長に聞いてみた。「僕も小笠原と同じく、就農したときには認めてもらえずに、自分のしたいようにはさせてもらえなかった。でも、それは本当に経営を任せる事が出来るかどつかを見極めているんだ。なぜなら一生懸命これまでやってきた畑を任せることになるからな。1年や2年で簡単に任せられる事ではないだろ。自分が任せてもらうまでには7、8年くらいはかかった。だからこそ10年は我慢と言つ風に伝えただ」と話した。これに小笠原さんはハツとした。自分も15年間ホテルマンとして勤務し、毎日の業務をこなして自分のスキルを磨き、7年目でリーダーになり、ようやく指示する立場で経営にも関わらせてもらえたのではないかと。前職のリーダー気分



JAでたまに会うと作業状況などについて話し合う

が抜けずに、少し分かつているような気持ちになつていたのでかもしれない。だからこそ、義父の本当の気持ちを察することが出来なかったと感じた。そして小笠原さんは、農業に関しては全くの初心者であることを改めて自分に言い聞かせ、農業も同じく任せてもらえるレベルに上げていく事を目標に取組むことと

した。

こつこつと取り組んでいくうちに、私の作業に対して義父から指摘される事が以前であれば100個あったことが、今では20、30と減つていき、少しずつ信頼を得てきている事を勝手ながら感じていた。

私の目指す将来像

ある日、盟友たちと話をしながら剪定作業を行っている時、1人が「剪定つて失敗はあったりするけども成功つてないよな」とボンリ。「人それぞれのやり方があり、それがその人の成功なのかもな」などと話していた。それはリンゴの剪定に限らずにリンゴ栽培作業全般に言えるのではないか。

そこで、私はある事に気が付いた。それは大好きなカレーと一緒にあることに。カレーは調理器具から調味料、材料などそれぞれである。さらに調味料に関しては「正解がない」という代表例と言っても過言ではないだろう。しかし、正解はないと言いつつも、カレー

小笠原さんにとってのキーマンを紹介



成田 陽平さん（黒滝地区）43歳

愛媛県出身
青年部24代部長
（平成27年～29年度）

栽培面積 2.4ha
経営の構成 義父・義母
妻

仲間の輪を広げてくれた
成田 陽平さん

愛媛県出身で、後に弘前大学へ進学。在学中に、ボーリング場で働いていた時に今の妻と出会い、妻の実家のリンゴ園へ手伝いに行った事で初めてリンゴ園を見たと言つ。その後結婚し、好きなボーリング場で勤めたい気持ちと、リンゴ農家をやってみたい気持ちがあったが、義父から「就農するならゼロからのスタートだから、若く脳みそが軟らかいうちに仕事を覚えた方がいい」と言われ、その通りだと感じた成田さんは就農を決めた。

その後、成田さんの作業のおかげで、JAからリンゴ高価格販売組合員表彰を受けたことが、義父からの信頼を得るきっかけとなり、経営移譲を受けた。この時就農して約8年が経過したという。成田さんはこれまで「毎年平年並みに下がることなく収量を確保する」を目標にリンゴ栽培と向き合っている。

そんな成田さんは今後、義父と義母の体が心配になってきたことから、「頑張りたくないで高品質リンゴ生産」を大きな目標としている。

そして妻と二人での経営体を目指している。

小笠原さんにとってのキーマンを紹介



佐久間 康幸さん（五所地区）42歳

神奈川県出身
青年部25代部長
（平成30年～31年度まで）

栽培面積 5ha
経営の構成 義父・義母
妻・通年雇用3人

憧れの先輩
佐久間 康幸さん

神奈川県出身であり、相馬地区に来るまではリンゴはスパーなどで見たことはあるが、リンゴの樹は見た事もなかったと言つ。

社会人の時に、社会人野球に所属しており、その時に出会った妻の実家がリンゴ農家だった。そこへ良く手伝いに行き、相馬の人達の暖かいコミュニケーションで魅かれ、就農することを決めたといい。

この地区に来て18年目になると言つ佐久間さんは、婿として

相馬地区に来ることは噂となり、直ぐに青年部に勧誘されて加入。また、婿として初めての青年部員となった。そして、義父と共に7、8年程一緒に農作業をし、栽培に関して一通りある程度出来るようになったことが認められ、任せてもらえるようになったという。

現在でも分からない事は沢山あり、毎日勉強の精神で農作業に励んでいる。青年部を引退した今でも当時の仲間や後輩と情報交換を兼ねた飲みニケーションは欠かせない。

ルーのみで様々な調味料を入れない方が万人受けする味になる。だが隠し調味料を入れることによって自分の個性を前面に出した味にもなる。どちらにするかは本人次第である。

小笠原さんは「個性を前面に出し、付加価値を付けられるようなリンゴを作って通常栽培のリンゴと差別化を図れるようにしたい」と思っている。

そして今後は「妻がやりやすい農業」を目指している。現在、丸葉栽培だけの園地をワイ化栽培やハイブリット栽培、高密植栽培にして、作業をしやすいようにしたい。これは成田部長の今後の話を聞いて小笠原さんも感化されたという。また、初心者が園地に来ても簡単に作業できる様、ホテルマン時代のパソコンスキルを活かして、品種や作業方法などの情報を紙やスマホにまとめ、来た人に簡単に伝えられる様にしていきたいという。これまで義父が作ってきた歴史と相馬地区が作ってきた歴史を崩すことなく自分の目指す農業をしたいと力強く語っていた。



園地で乗りこなすバゲの運転はお手の物



志麻さんと二人で選果作業に精を出す

編集者の声

小笠原さんは、全く知らない地域に飛び込み、コミュニティや仲間作りに不安を抱えながらも、相馬地区で農業を始めた。健康面や仕事面で様々な問題と向き合う事になったが、すべて解決へと導いてくれたのは、出会った仲間であった。同世代で悩みをなんでも話せる青年部の盟友をはじめ、同じ境遇であるからこそ熱く話し合えた元青年部長達が、小笠原さんを明るい農業の道へと導いてくれた。

不安だらけでやってきた農業だったが、やる気があふれる小笠原さんだからこそ、必然的に仲間の輪が広がったと言っても過言ではないだろう。

婿でも長男でも、やる気とコミュニティを大切に日々精進することが成長への第一歩であると改めて感じた。

今後、仲間と取組む小笠原さんの目指す将来像が現実になるように応援していきたい。



未来を担う若手農業者へ JA相馬村 部員募集中!!

～40歳までの方なら誰でも歓迎～

ライスロマンクラブの応援作業等の地域貢献活動や栽培技術研修会、他地域との交流会、健康診断による自己の心身を見つめ直す等の活動を行なっています。

心強い仲間がここにいる

問い合わせは 84-3215 JA相馬村本所 小野 迄